

〔史料紹介〕

立教大学池袋キャンパス設計に関わる在米史料について

鈴木勇一郎

立教大学池袋キャンパスの設計を担当したマーフィー&ダナ建築事務所の共同経営者の一人、ヘンリー・K・マーフィー（Henry Killam Murphy）の関係史料が、現在イエール大学スターリング記念図書館（Sterling Memorial Library）〔写真1〕内にあるマニュスクリプト&アーカイブズ（Manuscripts and Archives）に所蔵されている。

筆者は、2011年9月に同大学を訪れマーフィー文書を調査したが、その際立教大学に関係する史料が含まれていることを確認した。またこの際、コロンビア大学所蔵のタルボット・ハムリンコレクションも調査し、ここでも立教関係の史料を確認することができた。

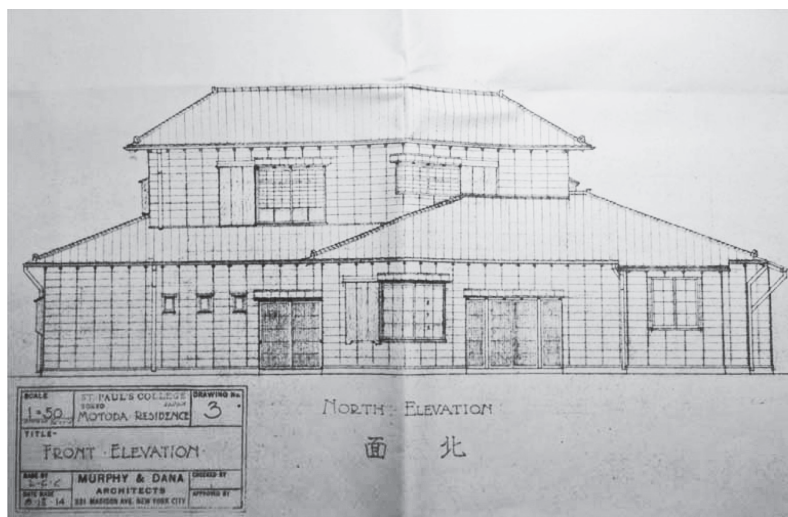
1、イエール大学所蔵マーフィ文書（Murphy Papers〔MS231〕）

マーフィー文書は、彼が建築家として活動した全地域にわたった幅広い内容をもつもので、量的にも膨大である。アメリカ国内だけでなく、彼が重点的に活動した中国のほか、朝鮮、日本など東アジア地域の建築の関係史料も数多く含まれている。

今回、主に調査したのは「セントポール」の名称が含まれている3つのフォルダ合計33件である。その中での特に注目されるのは1914年春に立教大学の設計を準備するために、マーフィーが東京を直接訪れて実地調査した際の報告書である（Box4 Folder29）。彼が東京でどのような問題に直面し対処したのか、という経緯を具体的に知ることができる。この他、建築に直接関わる史料としては、マーフィーが現場を調査した際のメモ類（Box4 Folder29）、本館や図書館、チャペル、食堂などの図面



（写真1）イエール大学スターリング記念図書館

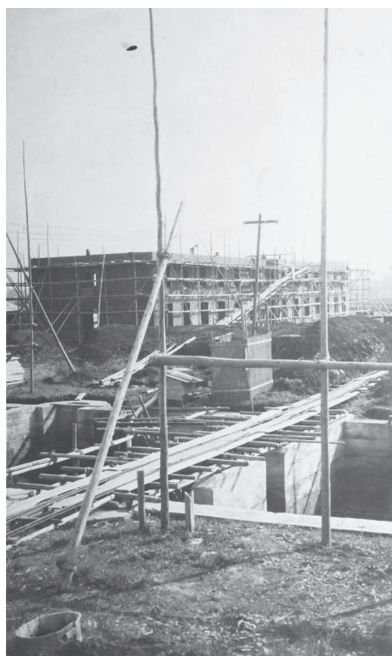


(写真2) 元田作之進住宅図面

(Box99) がある。この中にはすでに立教大学で所蔵しているものと同じ図面もあるが、結局、建設されることはなかった元田作之進と須藤吉之祐の住宅図面〔写真2〕はこれまで紹介されていなかったものである。この他、建設途中に工事を監督するために派遣された建築家ウィリアム・ウィルソンが撮影した建設工事の写真 (Box4 Folder29)〔写真3〕なども興味深い史料である。

同文書には、設計や工事に直接関わる以外にも立教関係の史料が含まれている。その中でも“Rikkyo Times”という英字新聞 (Box4 Folder30)〔写真4〕は注目される。これは1915年から少なくとも数年間にわたり発行されていたが、これまでその存在が確認されていなかったものである。残念ながら、同文書には1915年7月と1919年5月の2号分しか所蔵されていないが、号数を見る限り、少なくともこの間は継続的に発行されていたようであり、国内外の他の場所でもどこかに所蔵されている可能性は高い。

まだ完全には整理が終わっていない状態なので、詳細な目録はない。実際、今回の調査でも中国関係の



(写真3) 建設工事中西寮 (1916年11月1日)

フォルダの中にも立教のことを記した新聞記事を見つけることができるなど、今回調査したフォルダ以外にも立教関係の史料が含まれている可能性は否定できない。なお、日本に関係するものとしては立教大学のほか、聖路加国際病院の設計に関わる史料が現在確認できた〔写真5〕。

2、コロンビア大学所蔵ハルミンコレクション

タルボット・ハムリン (Talbot Hamlin) は、コロンビア大学教授を務めた建築史家である。その史料群は同大学アヴェリー図書館 (Avery Library) 内にあるアーカイブに所蔵されているが、ハムリンはコロンビアに赴任する以前にマーフィ&ダナ建築事務所に勤務していたことがある。従ってそのコレクションの中には同事務所在勤中に関与したプロジェクトに関わる史料が含まれている。

同コレクションには立教大学の名称が付されたフォルダが存在している。しかし、マーフィ&ダナ事務所が作成したキャンパスの鳥瞰図と平面図の写真のみがあり、既に知られているものである (21:11)。



(写真4) 『RIKKYO TIMES』1919年5月31日号

この他、神戸女学院のフォルダも存在し、はマーフィ&ダナ事務所によって作成された完成予想図などを確認することができる（21:10）。現在、同学院のキャンパスは昭和に入ってから建設されたヴォーリス事務所設計による一連の建築群が著名であるが、それ以前に同事務所によって計画案が作成されていたことが分かる。

立教大学に限らず、戦前の日本におけるミッションスクールの建築の大半は、外国人の建築家によって担われていた。こうしたことから、すでに日本国内で失われている史料でも、アメリカをはじめとする国外にも史料が所蔵されている可能性が高く、こうした調査を展開していく重要性をあらためて確認することができた。



（写真５）聖路加国際病院の完成予想図